



話す内容があれば英語は話せる

池上 彰 Ikegami Akira

私は英語が話せない。ずっとそう思っていました。学校の英語の試験では、それなりの成績がとれたのに、英米人を前にすると、会話が續かない。これは「英語が話せない」からだと思っていたのです。

ところが、この固定観念を打ち破るような出来事がありました。私がNHKの「週刊こどもニュース」を担当していたときのことで。出演者の中学生の男女が、外国人観光客に街頭インタビューするという企画でした。

男の子は、頭の中で一生懸命に和文英訳をした上で話しかけますが、相手から答えが返ってきたら、それでおしまい。会話が續きません。なんだか私の若い頃の姿を見るようでした。

ところが女の子は、前もって文章を作ろうとしません。男の子が、「えーと、May I ask ... えーと」とやっている間に、にっこり笑って、「インタビュー、OK?」と相手に迫ります。「きちんとした」英語の文のやりとりにはなりません。知っている英単語を並べて、にっこり笑うだけで、会話が成立してしまっただけです。

うーむ、これぞコミュニケーションの極意かもしれないと、私は感心しました。

と同時に、あることに気づきました。それは、自分が英語を話せないと思っていたのは、そもそも話すべき内容を持っていなかったからではないか、ということでした。

英米人（あるいは英語を話せる外国人）と会話するとき、「How do you do?」と話しかけることはできても、挨拶が終わったら、それっきり。そのあとが續かないのは、話したいと思う内容を持っていなかったからです。

どうしても相手から話を引き出す必要に追い込まれますと、英語が口から出てくるのです。今から4年前、スロバキアに取材に行ったときのことで。かつてのソ連軍によるチェコスロバキア侵入の歴史的事件に関してスロバキアの学者の見解を聞くことができました。せっかくのチャンスですから、知っている英単語を並べ、必死になって質問します。すると不思議。会話が成立してしまうのです。あれっ、自分は英語ができるじゃん、と思ったものです。

去年のクリスマス、以前に中東取材でインタビューしたヨルダン人の研究者が来日。一緒に食事することになりました。彼はイスラム教徒です。京都見物から帰ってきた彼と東京都内で食事したのですが、「日本人の多くは仏教徒だと京都で説明を受けたが、なぜこんなにクリスマスを祝うのだ?」と質問攻めです。

この分野なら、質問は想定内。いくらでも答えられました。日本ではクリスマスが商業化していること、仏教が考える来世、日本人の宗教観など、会話がはずみました。

話すべき内容があれば、会話は成り立ちます。学校英語で基礎は十分。あとは話す中身を獲得することなのです。もっとも、頭を絞っての必死の会話になって、何を食べたか思い出せないのですが…。

いけがみ あきら

1950年生まれ。ジャーナリスト。1973年、NHKに記者として入局。事件、災害、教育問題等を取材。1994年から11年間、「週刊こどもニュース」の「お父さん」。2005年に独立。主な著書に『そうだったのか! アメリカ』（集英社）、『わかりやすく「伝える」技術』（講談社）。